

女子高生、中古音を学ぶ(2)

中村雅之

1. 若菜、途方に暮れる

月曜日の午後、若菜は戸惑い、混乱していた。

日曜日ごとに、仙人と異名をもつ老学者から唐の時代の中国語の発音についての個人授業を受けるのが、最近の若菜の何よりの楽しみだ。昨日も楽しい講義のあと、帰り際に宿題をもらい、それを今日やろうと思ったのだが、いざ始めようとした途端に、基本的な問題にぶち当たってしまったのだ。仙人から出された宿題は以下のようなものだった。

<宿題>

- ①全濁音の字が清音化した後に、無気音になるか有気音になるかを、声調ごとに調べよ。
- ②現代音で無気音2声で読む字がすべて入声であることを証明せよ。

この問題に取り組むためには、まず全濁音(b/d/g/dz/z/dʒ/ʒ/ɦ など)の声母を持つ字をピックアップしなければならない。全濁音は呉音で濁音、漢音で清音になるはずだ。なおかつ、現代北京音では全濁音の字は第2声か第4声になる。第1声と第3声には全濁音はないはずである。それは仙人が示した次のような中古の四声と現代の声調の対応表から明らかだった。

	平声	上声	去声	入声
清音	1	3	4	1・2・3・4
次濁	2	3	4	4
全濁	2	4	4	2

この表によれば、平声と入声の全濁音は第2声に、上声と去声の全濁音は第4声になるはずだ。しかし、黄金(オウゴン)の‘金’や群青(グンジョウ)の‘青’は濁音なのに第1声だし、天井(テンジョウ)の‘井’は第3声だ。上の表と全然あっていない!これはどういうことなのか?そもそも中国語の問題なのか、日本語の問題なのかも分からない。うーん、困った。これでは宿題どころではない。恥を忍んで葵(あおい)先生の所に聞きに行こう。

職員室に行くと、しょぼくれた顔の私に葵先生が声をかけてきた。

「どうしたの?夏バテしたカップのような顔をして」

「カップって……」

「昨日も仙人の所へ行ってきたのでしょうか」

「はい。昨日も帰り際に宿題を頂いたのですが、宿題に取り掛かろうとしたら、それ以前の基本的な問題が立ちはだかりまして。いったい、‘金・青・井’は全濁音の字なのでしょうか？」

「いいえ、どれも清音の字ね」

「でも、黄金・群青・天井という熟語では濁音で読みますよね。清音の字をどうして濁音で読むのですか？」

「それが宿題なの？」

「いえ、宿題は、①全濁音の字が清音化した後に無気になるか有気になるかを声調ごとに調べよ、②無気音第2声の字がみな入声であることを証明せよ、なんですけど、そもそもどれが全濁音の字か分からなくなってしまっ」

「なるほどね。まず、もともと清音の字でありながら、日本語で濁音になるものには二つのタイプがあるの。第一は、全くの例外。つまり、考えるだけ無駄なもの。例えば、土(ド)・暁(ギョウ)・激(ゲキ)・打(ダ)などね。これらは清音だけど、様々な理由で、あるいは理由不明で、日本語では濁音になっている。でもこのタイプはあまり多くはないから、大きな障害にはならない。そして第二は、日本語の連濁によるもの。これは知っておく必要がある。さっきの金・青・井はこれね。漢字語彙の連濁は鼻音韻尾の後で起こる」

「鼻音韻尾というと-m/-n/-ŋ ですね」

「そう。それらは古い時代、漢語が取り入れられた当初は中国語のように発音されていたらしい。そして、日本語における濁音というのは、本来的には‘鼻音+破裂音など’のことなの。和語の例だと、‘肌(はだ)’は hanta > handa > hada という過程を経たと思われる。あるいは、‘～にて’の‘にて’という助詞は、口語では最初の母音が脱落して、nite > nte > nde > de という変化を経て今では‘で’になっている。つまり、-mp-とか-nt-という連続があると自然に濁音化させたいのが日本語の、とりわけ古代日本語の癖と言っていい。それで特に呉音では、鼻音韻尾の後に清音の字が続くと、黄(-ŋ)金(オウゴン)・群(-n)青(グンジョウ)・天(-n)井(テンジョウ)のように簡単に濁音化してしまうというわけ。金(-m)色(コンジキ)・誕(-n)生(タンジョウ)・東(-ŋ)西(トウザイ)・公(-ŋ)家(クゲ)・反(-n)吐(ヘド)などもその類だね。最後の二つは濁音化した後に鼻音の形跡がなくなっているところなんか、和語の‘肌(はだ)’や‘で’とそっくりだから、完全に日本語化していたということだろうね」

「うーん、そうすると全濁音の字を拾うのも容易ではないですね」

「そうでもないよ。要するに、連濁の状況が生じない例を拾えばいい。単独の読みとか、熟語の語頭に来るものを拾うとか」

「そうか。‘権化(ゴンゲ)’の場合だと、‘権’は全濁音だけれども、‘化’の方は全濁音なのか、それとも清音が連濁を起こしたものなのか、分からないということですね」

「そういうこと。実際、‘化’は呉音がケ、漢音がカで、レッキとした清音だし」

「うわー、‘権化’とか‘七変化(シチヘンゲ)’とかを見てしまうと、騙されそうです」

「語頭に来る‘化粧(ケシヨウ)’とか‘化身(ケシン)’とかを思いつけば全く問題なし！」

「分かりました。少しメドが立ってきました」

2. 数学的な世界

葵先生の助言を得て、一挙に見通しが明るくなった。まずは、これまで出て来た字で全濁音のものを声調ごとに分類してみることにしよう。

現代音で第2声：成 chéng、平 píng、強 qiáng、図 tú、途 tú、頭 tóu、白 bái、

現代音で第4声：静 jìng、定 dìng、豆 dòu

なるほど。成から頭までは平声だから、全濁音の平声は現代北京音では有気音2声になっているようだ。それ以外は例が少ないけど、すべて無気音になっている。とりあえず、仮説を立ててみよう。それに例を追加して確認すればよい。

仮説1 全濁音平声 → 有気音2声

仮説2 全濁音入声 → 無気音2声

仮説3 全濁音上声・去声 → 無気音4声

よし、あとは用例の追加だ。全濁上声は早くに去声に合流したということだから、区別しなくてもよいだろう。

全濁音平声：「権 quán：権化ゴンゲ・権力ケンリョク」

「沈 chén：沈丁花ジンチョウゲ・沈没チンボツ」 *ジンチョウゲ<ヂンチャウゲ

「貧 pín：貧乏ピンボウ・貧困ヒンコン」

「従 cóng：従来ジュウライ・従容ショウヨウ」

*前・銭・全・情・談・堂・同・群……濁音しか思いつかないが恐らく全濁音

全濁音入声：「極 jí：極楽ゴクラク・極端キョクタン」

「直 zhí：直伝ジキデン・直視チョクシ」 *ジキデン<ヂキデン

「読 dú：読書ドクショ・読本トクホン」

*毒・独・賊・族・勃・雑……濁音しか思いつかないが恐らく全濁音

全濁音上声・去声：「道 dào：道路ドウロ・神道シントウ」

「大 dà：大小ダイショウ・大変タイヘン」

「地 dì：地面ジメン・地下チカ」 *ジメン<ヂメン

「自 zì：自身ジシン・自然シゼン」

「代 dài：代理ダイリ・代謝タイシャ」

「逗 dòu：逗子ズシ・逗留トリュウ」 *ズシ<ヅシ

*殿・動・鈍・病・郡……濁音しか思いつかないが恐らく全濁音

列挙した例を見渡してみると、どうやら仮説は全て正しいと言えそうだ。つまり、唐代に

全濁音が清音化した後、平声では有気音になり、仄声（＝上・去・入声）では無気音になった。それが現代北京音にも受け継がれているということなのだろう。それにしても、平声と仄声でこんなにキレイに分かれるのは不思議だ。数学の方程式を解いているような気になる。残るは宿題の②だけど、これはもう答えが出ていると言ってよいだろう。声調の対応表によれば、現代音で第2声になるのは平声と入声しかない。そして、平声であれば必ず有気音になっているはずだから、無気音2声になるのは入声しかありえない。うーん、音声の歴史を追究する学問って、何だかとっても数学的な世界だ。

3. 入声の見分け方

次の日曜日、若菜は箱入りの落雁を手土産に仙人の家へ向かった。前日にデパ地下の‘長野フェア’でいくつかの果物や漬物と一緒に買ったもので、授業料代わりに持参して行きなさいという母親の提案に従ったのだ。仙人は「おお、小布施の栗落雁か」と喜んで、コーヒを淹れてくれた。どうやら仙人は菓子に目がないようだ。

宿題の成果を報告すると、仙人は、日本語の知識だけでも90%は入声字を見分けることができるが、北京語の知識が加わるとほぼ100%分かれると言って、入声字識別のポイントを次のようにまとめてくれた。

- a. 熟語で小さい「ッ」が出たら入声。合唱ガッショウ・結果ケッカ・国家コッカなど。
- b. 北京語で無気音2声なら入声。毒 dú・別 bié・急 jí・答 dá など。
- c. 「ク・キ」で終わったら-kの入声、「ツ・チ」で終わったら-tの入声。
息ソク・石セキ・出シュツ・吉キチなど。
- d. 「ウ」で終わり、北京音が-uや-ŋで終わらなければ、-pの入声。旧仮名遣いでは「フ」になる。吸キウ（キフ）xī・塔トウ（タフ）tǎ・立リュウ（リフ）lì・雑ゾウ（ザフ）zá など。
（北京音で-u/-ŋに終わる老ロウ lǎo[lau]・流リュウ liú・郎ロウ láng は入声ではない）

「最後の‘立・雑’は普通‘リツ・ザツ’と読んでいませんか？」

「うむ。慣用的にはそう読んでいるが、本来は‘リュウ・ゾウ’の方が由緒正しい読みだ。例えば、法隆寺はいつごろ建ったか知っているかな？」

「え？いきなり法隆寺ですか。確か、7世紀に建立されたと習ったような気がします」

「いま‘建立コンリュウ’と言っただろう。その‘立リュウ’が本来の読みだ。あるいは平方メートルを‘平米ヘイベイ’と言うように、立方メートルを‘立米リュウベイ’と言うのも本来の読みを伝えたものだ。雑も同じく‘雑炊ゾウスイ’とか‘雑巾ゾウキン’の‘雑ゾウ’が本来の読みだ。」

「それがどうして‘リツ・ザツ’になったのですか？」

「多くの熟語によって入声字であることが記憶されていたからだろう。-pの入声はもともとは‘フ’で終わっていたが、日本語の音韻変化によって語中の‘フ’は‘ウ’になった。すると入声字であったかどうかは分からなくなる。しかし、‘立地・立体・立証’などによ

って明らかに入声字だという意識が働いた結果、‘リツ’という読みを作ってしまったのだ。雑も同様で、‘雑多ザッタ・雑貨ザッカ・雑踏ザットウ’などによって入声字であるという意識から‘ザツ’という読みの方が定着したということだ。他の‘急・習・答’などはすぐに入声字であることが分かる熟語がなかったために、音韻変化の通りに‘キュウ・シュウ・トウ’になった」

「なるほど。ツで終わるからと言って、すべて-tの入声とは限らないのですね。他にも例はありますか？」

「そうだな、‘固執’と書いて、‘コシツ’と読んだり、‘コシュウ’と読んだりするだろう。‘執権’や‘執政’という熟語を身近に感じる人にとっては、入声ということで‘シツ’と読みたくなるのだろうな。他には‘湿’もそうだ。これも-pの入声だが、‘湿気シッケ・湿地シッチ・湿疹シッシン’などによって、‘シツ’という読みが作られたのだろう。そんなものかな。まあ、-pをツと読む例外は全体から見ればごく少数だ」

4. 西郷どんの銅像

「先生、日本語の音読みと北京音の情報が中古音とリンクしていることは分かったのですが、北京音と日本語はあまり似てはいないですよ。解は jiě とカイだし、黒は hēi とコクです。それは一体どうしてなのでしょう？」

「ふむ。まあ、現代北京音も日本漢字音も、言うなれば西郷隆盛の肖像のようなものだ。中古音はさしずめ西郷どんの銅像だな」

「……??」

「上野公園に西郷隆盛の銅像があるのは知っているかな？」

「はい、修学旅行で見ました。浴衣を着て犬を連れた姿のものですね」

「そうだ。あれをどうやって作ったと思う？」

「どうやって？写真を見て作ったのでは？」

「いや、西郷は写真嫌いで、西郷を写したものは一枚も残っていないそうだ」

「へえ。それじゃ、想像ですか？」

「1877年の西郷の死から6年後にイタリアのキヨッソーネという画家が肖像画を描いたので、それを基にしたそうだ。この肖像画は教科書などによく載っている。キヨッソーネは明治天皇やシーボルトの肖像画も描いている著名な画家だ。しかし、キヨッソーネ自身は西郷との面識はなかった」

「え？面識もない、写真もない、それでどうやって描いたのですか？」

「西郷の弟と従弟の顔を参考にしたらしい」

「へえ、血縁のある者だから似ているだろうということですか」

「そういうことだ」

「ということは、今見ている西郷像は本来の姿そのものではないということですか？」

「厳密にはそうなる。しかしまあ、それでも銅像は十分に西郷の姿を表したものだと考え

てよいのだろう。キョッソーネは一流の画家だったし、銅像を作った高村光雲も一流の彫刻家だった。それにキョッソーネの当時はもちろんのこと、1898 年に銅像が作られた時でさえ、西郷の家族や知人は生きていた。彼らの意見を聞きながら作られたものが、似ても似つかないものであるはずはなかろう」

「現代北京音や日本の音読みはキョッソーネの肖像画のようなもので、中古音はそれを材料として復元した西郷の銅像のようなものということですか」

「まあ、そうなるかな。比喻としては少し乱暴だが」

「でも、北京音はむしろ中古音の孫やひ孫にあたるのではありませんか」

「そうとも言える。ただし、北京音は中古音の直系ではなく、傍系と言うべきだ」

「傍系ですか？」

「ふむ。そして遣唐使や留学僧たちが伝えた日本の漢音は中古音を直接観察した、いわば写真のようなものかな」

「とすると、漢音こそが最も頼るべき資料ということになります」

「その通りなのだが、いかんせん、中古音を写してはいるとは言っても、その解像度は非常に粗い。あくまでも日本語の音韻体系というフィルターを通して撮影をしたものなのだ」

5. 中古音とは何か

「少し話が抽象的すぎて混乱してきました。そもそも先生が銅像になぞらえた中古音とは厳密には何なのでしょう？」

「それが問題だ。中古音を厳密にどう定義するかは研究者によって異なる。中古音研究の開祖はスウェーデンの学者カールグレン (Bernhard Karlgren 1889-1978) という人だが、彼によれば唐の長安の言語が共通語として全国に広がり、そこから現代諸方言へと発展した。その諸方言の祖語たる唐代の言語を彼は Ancient Chinese と名付け、それを我々は中古音と呼んでいる。カールグレンは 19 世紀に発達した比較言語学の手法を中国語に応用して中古音を再構したのだ」

「長安の言語が全国に広がったというのは、どうやって確認したのでしょうか？」

「仮説だ。中国語の諸方言は互いに似ている部分が多い。似ていない部分も一定の対応があり、共通の祖語から分かれ出たと仮定できる。そのような祖語があるとしたら、唐代に世界最大規模の都市として絶大な影響力を持った長安が最もふさわしい」

「なるほど。それで当時唐に渡って中国語の発音を写し取って来た日本の漢音も中古音と対応があり、中古音再構の資料になるということですね。あれ？すると日本の呉音はそれよりも古いので中古音の資料にならないのでは？」

「カールグレンの説は必ずしも全面的に受け入れられてはいない。今では隋の陸法言が編纂した『切韻』(601 年) という韻書の体系を中古音と呼ぶのが一般的だ。韻書というのは作詩における押韻の基準を示した辞典だ。どの字とどの字が押韻可能だ、というような情報が含まれている。科挙の作詩の試験ではこの韻書が押韻の基準となったのだ。なお、原本の

『切韻』は散逸して現存しない。カールグレンが利用したのは増補版である『大宋重修広韻』(1008年)だ。この話は複雑なので詳しい説明は後回しにしよう。とにかく、狭義には『切韻』の体系を中古音と呼ぶのが普通だ」

「『切韻』は長安の発音に基づいているのですか？」

「『切韻』の性格については諸説ある。とりあえず今は隋代の標準音ということで納得してくれ。カールグレン以後、『切韻』の体系と唐代長安音の体系が同じでないことが確認されている。『切韻』の体系を前期中古音(Early Middle Chinese)、そして唐代長安音を後期中古音(Late Middle Chinese)と呼ぶことが今では一般的だ。日本の呉音にはかなり古い時代のもものも含まれているが、主要な層は5～6世紀の南方音を反映しているらしく、前期中古音にかなり近い体系を示している」

5. 北京語とは何か

「先ほど、北京語は中古音の直系ではなく、傍系だとおっしゃいました。どういうことでしょうか？」

「北京語というのは、単純化して言えば、北方の民族が習い覚えた中国語なのだ」

「北方の民族というと、満洲族とかモンゴル族ですか？」

「それだけではない。北京を支配下に置いたのは、古くは5～6世紀の鮮卑、唐代にはソグド・突厥、10～13世紀は沙陀・契丹・女真、そして13～14世紀のモンゴル、17～19世紀の満洲(＝女真)と続く」

「ははァ、ほとんどの時代で非漢民族が北京を統治していたということですか」

「そう考えてよい。北京は北方民族が中国を支配する際の牙城だったのだ。前に杜甫の春望を読んだだろう。あれはどのような内容だったかな」

「戦乱で荒廃した長安の様子を嘆いた詩です」

「うむ。その戦乱とは世にいう‘安史の乱’だ。安史とは安祿山とその部下である史思明の名に由来する。彼らはサマルカンドの出身でソグドと突厥の混血であり、6種の言語を話したと言われている。安祿山は当時遼寧・北京・河北を含む地域を統括する軍事と行政の長だった。歴史で言う‘節度使’というものだ。清末民国初の軍閥のようなものと思えばいい」

「軍閥ですか？袁世凱とか張作霖とか？」

「そうだ。安祿山の軍は756年に北京から洛陽を経て長安を占拠した。この時に杜甫も軟禁されている。春望を読んだのは757年の春ということになる。安祿山の戦いには彼らの一族の他に突厥の王族や契丹人なども参加したというから、それを聞いただけでも北京周辺が非漢族の土地だったことが想像できる」

「そのような人々が漢化していく中で北京語が形成されたと？」

「そういうことだ。内破音の入声韻尾が消えたのもそれが理由だろう」

「諸民族の接触によって北京語が生まれたとすると、発音だけでなく文法などにも影響があったのではないのでしょうか」

「ある。南北朝時代から接触はあったはずだが、その影響が如実に表れるのは唐代になってからだ。中国語のSVO語順に対して、北方周辺言語のほとんどがSOV語順であったために、‘比’を使った比較表現や‘把’構文などが生まれたのだ」

「もう少し詳しく説明して下さい」

「比較表現は伝統的には‘形容詞＋於＋対象’という語順だ。漢文で‘苛政猛於虎（苛政は虎よりも猛なり）’というのを習っただろう」

「はい。民を苦しめる厳しい政治は虎よりも苛酷だ、ということです」

「‘猛’という形容詞の後に‘虎’という比較対象が来る。これが伝統的な語順だが、唐代から‘比＋対象＋形容詞’という語順が出て来る。9世紀の范攄の詩に‘当時心比金石堅’とある。現代の語順と同じだ。[猛なり＋虎よりも]という語順から[金石よりも＋堅い]という語順に変わったのだ。‘把’構文も唐代に生まれたと言われている。白居易の詩に‘莫把杭州刺史欺（杭州の刺史を欺くことなかれ）’というのがある。[杭州の刺史を＋欺く]という語順だ。これらは全て言語接触による結果だろう。SOV語順を母語に持つ者が中国語を話すようになると、このような混合言語が生まれるのは自然なことだ」

「なるほど。北京語が傍系だというのは、もともと北方言語の話者が習い覚えた中国語だからということですね」

6. 非鼻音化

少し脱線しすぎたと言って、仙人は次濁音声母の話始めた。[m/n/ɲ/l/j/ɲʑ]のように音声学的には有声音だが、全濁音[b/d/g/dz/z/dʒ/ʑ/d/ɦ]とは異なり対応する清音を持たないものを次濁音と言うのだそう。次濁音が平声では全濁音と同じ陽調になり、上声では清音と同じ陰調になるという話は前に仙人から聞いたことがある。入声では清音とも全濁音とも違う振る舞いをして後に去声に合流するということがあった。仙人は、次濁音のうち、[l]は呉音でも漢音でもラ行になり、[j]はヤ行・ワ行になるが、[m/n/ɲ/ɲʑ]の鼻音声母は注意が必要だと言って、次濁音と北京音・日本漢字音の対応例を示してくれた。

	来	羊	米	奴	五	日
中古音	l	j	m	n	ɲ	ɲʑ
北京音	l	(ゼロ)	m	n	(ゼロ)	r [ʐ]
呉音	ライ	ヨウ	マイ	ヌ	ゴ	ニチ
漢音	ライ	ヨウ	ベイ	ド	ゴ	ジツ

「ここでの中古音は例の‘ざっくり中古音’のことなので、後々こまかな修正が入ることになるが、今は素直に見てくれ。どうかな。この対応を見てどう思う？」

「まず、‘来’は全く問題ありません。中古音も現代北京音も同じだし、日本漢字音でもラ行ですから違和感はありません。次の‘羊’は北京音 yáng ですが、この y は介音-i-の

ことなので、解釈としてはゼロ声母ということですね」

「そういうことだ」

「そこから後は少し変わっています。中古音 [m] の‘米’が呉音でマ行になるのは納得ですが、漢音でバ行の‘ベイ’になるのが不思議です。[n] の‘奴’も呉音でナ行になるのは自然ですが、漢音でダ行の‘ド’になるのが解せません。[ŋ] の‘五’が呉音・漢音ともにガ行になるのは自然です。鼻音の ŋ も破裂音の g も日本語ではガ行でしか表せませんから。最後の‘日’はそもそも中古音が [ɲʑ] という変な音なのが気になります」

「ふむ、大体問題点は出たようだ。鼻音声母について少し説明しよう。今は簡単な説明だけにして、あとは練習問題をこなしながら納得してもらうことにする。まず、唐代の長安に顕著に見られる現象として‘非鼻音化’というものがある。[m/n/ŋ] と [ɲʑ] では少し様相が異なるので、今日は [m/n/ŋ] だけしにて、[ɲʑ] は来週に回そう。

[m/n/ŋ] は当時の長安では、鼻音の息が十分に鼻から抜けずに途中から破裂音になって [mb-/nd-/ɲg-] と発音される傾向が強かったようだ。これを‘非鼻音化’と称している。そのため、それを聞いた日本人にはバ行・ダ行・ガ行に聞こえた。もっとも [ŋ] については非鼻音化しているかどうかに係わらずガ行になるので、呉音でも漢音でもガ行だ。前に呉音で濁音のものは一部の例外を除いて漢音では清音になると言ったが、その例外がこの [ŋ] だ。非鼻音化は長安音の特徴なので、南方音を伝えた呉音では [m] はマ行、[n] はナ行で、漢音だけがそれぞれバ行・ダ行になる。[ŋ] が北京音でゼロ声母になることにも注意してくれ。朝鮮音でもゼロ声母だ。北方の非漢族にとっては [ŋ] という声母は発音できないのだ。上海語や広東語では今でも [ŋ] が声母として残っている。つまり、[ŋ] の対応は次のようになる。

中古音	ŋ
上海語	ŋ
広東語	ŋ
北京語	ゼロ
朝鮮語	ゼロ
日本語	g

なお、中古音の [m-/n-] は北京語でも同じく [m-/n-] だ。では、練習問題だ。

①次の読みは呉音か漢音か。「馬力バリキ」「駿馬シュンメ」「滅裂メツレッツ」「泥酔デイスイ」

②中古音の声母は何か「怒」「罵」「外」

中古音の声母は日本語の読みと北京音から分かるはずだ」

「えっと、まず馬・滅・泥は北京音で mǎ・miè・ní ですから、マ行で読む駿馬シュンメと滅裂メツレッツが呉音で、バ行で読む馬力バリキとダ行で読む泥酔デイスイが漢音です」

「よし、その調子だ」

「怒は北京音で nù だから、中古音でも [n] です。憤怒フンヌが呉音で、怒声ドセイが漢音ですね。罵は mǎ だから中古音も [m] です。罵倒バトウという熟語しか思いつきませんが、

これはバ行だから漢音です。外は北京音で wài ですから……これはゼロ声母でしょうか。先ほどの羊 yáng がゼロ声母だったのと同様に、この w も-u-介音なので、解釈としてはゼロ声母になります。外は日本語ではガ行ですから中古音は [ɣ] です。外道ゲドウと外見ガイケンではどちらが呉音でしょうか？」

「外ゲが呉音で、外ガイが漢音だが、今は気にしなくてもよい。それにしても‘憤怒フンヌ’という熟語がやけにあっさりと出て来たな」

「実は最近、テレビで高倉健の‘君よ憤怒の河を渉れ’という映画を見まして」

「ほー、懐かしいな。ワシが高校生の頃の映画だ。しかし、映画のタイトルは確か‘きみよフンドのかわをわたれ’ではなかったかなア」

「そうなのです。解説者によると、西村寿行の原作は‘フンヌ’だったのに、映画のポスターではわざわざ‘ふんど’とルビを振っていたそうです。なぜか呉音から漢音に変わったのですね」

「ふむ。あの映画は中国でも‘追捕’というタイトルで大ヒットしたのだ。何しろ文化大革命が終わって初めての外国映画だったし、内容がなあ、文革で不遇の境遇にあった人々の共感を得たのだ」

「いわれなき罪を負わされて抗う話ですからね」

「うむ。今日はなんだか余計な話が多かったな。これはきっと、あの美味しい栗落雁のせいだな」

「……」

7. 変な宿題

仙人の話があちこちに飛んだお蔭で、気がつくやうに夕暮れ時だった。小布施の栗落雁のせいにしていただけ、もともと雑談をするのが好きなのに違いない。葵先生も仙人の話はよく脱線すると言っていた。いつものように宿題を頂いて家に帰ることにした。宿題の一つ目は次のようなものだった。

①呉音と漢音で（強引に）読みなさい。「老若男女」「境内」

②中古音の声母は何か？「木」「岸」「流」「謀」「努」

③中古音 [dau] 上、[bin] 平、[ɣan] 去、[nap]、[dzap]、[biɛt] [miɛt] [ɣiɛp] の現代音をピンインで書きなさい。

これはまあ、これまでと同じ形式だからいいのだが、二つ目が変わっていた。韓国人が発音する「맞아요 (その通りです)」「뭐야 (何ですって)」「너무 (とっても)」の音声を葵先生から聴かせてもらうように、というのだ。私はまだハングルが読めないのに、このまま葵先生に見せるしかない。果たして、そんなに都合よく音声が出て来るのだろうか。仙人は自信たっぷりだったけど。

明日いきなり葵先生にお願いしても、その場ではどうにもならないだろうと思い、仙人がくれた宿題のプリントのハングルをスマホで撮影して、葵先生にメールで事情を説明した。5分も経たないうちに返信が来た。MP3形式の音声ファイルが添付されていて、質問は明日受け付けるから何回も聴くようにとあった。

音声ファイルを聴いてみた。同じフレーズを何人もの音声で連続して聴けるように編集してあった。最初のフレーズは「バジャヨ」のように聞こえるし、「マジャヨ」のようにも聞こえる。二つ目は「ボヤ〜モヤ」、三つ目は「ドム〜ノム」だ。ひょっとして、これが仙人の言っていた非鼻音化なのだろうか？朝鮮語にも非鼻音化は起こっているのか？念のためにハングル部分を google レンズで撮影してテキスト化し、google に読み上げてもらうと、はっきりと「マジャヨ」「モヤ」「ノム」であった。どうやら発音に揺れがあるらしい。よし、明日学校に行ったら葵先生に詳しく訊いてみよう。

8. 十年前のゼミ発表

翌日、若菜は放課後の教室で葵先生から話を聞いた。何とあの音声データは十年前に仙人のゼミで、学生だった葵先生が発表した際に使用したものだという。仙人のゼミでは定期的にみんなの前で一人 30 分程度の発表を義務付けられていたそうだ。葵先生の発表テーマは「唐代における全濁音の清音化をめぐる考察」だったとのこと。

「具体的にはどのような内容だったのですか？」

「主に二つのテーマに関することだった。第一は、全濁音が清音化した後に、なぜ平声では有気音になり、仄声では無気音になったのか。第二は、なぜ非鼻音化は起こったのか」

「うわー、面白そう。内容を教えて下さい」

「そうね、じゃ第一の問題から。前提として、全濁音は長江流域の呉方言などに濁音として保存されている以外は、ほとんどの方言で清音化している。その際、すべて有気音になるとか、逆にすべて無気音になることもありうる。むしろその方が自然だとも言える。実際、南の方言にはそうなっているものもあるのだけれど、現代の主要方言である北方方言では平声と仄声で有気と無気に分かれている。それは唐代の長安を中心として起こった現象だと考えられる。他の方言が長安以上の影響力を持ったとは思えないから」

「それはそうですね」

「そうすると、問題はなぜ長安では全濁平声が有気音になり、全濁仄声が無気音になったのか、という点に帰着する」

「はいはい」

「その民謡みたいな合いの手は不要よ」

「あ、失礼しました。どうぞ続けて下さい」

「唐代の声調の調値については何か聞いた？」

「仙人の話では平声が低く、仄声は相対的に高かったと」

「そうね。そうだとすると、その高低の違いこそが有気と無気の差になったと考えられる」
「低いと息が出るのですか？」

「そう。上海などの呉方言では濁音は低く始まるけど、息を伴っている。語頭では半ば無声化しつつあるけど、有聲の息を伴う。つまり、濁音声母は実際には [bf] > [pf]、[df] > [tf] のようになっている。このまま清音化すれば [p^h] [t^h] のような有気音なるのが自然といえる。このように多くの息が出るためには低いことが必要なのだと思う。高い音調では声門が十分に開きにくいので、[bf] のような有聲有気は発音しにくく、息のない [b] にならざるを得ない。これが無声化すれば、当然無気音になる」

「なるほど。調値の高低の差で、平声が有気、仄声が無気になったのか」

「あ、これは私の妄想だから」

「うふ。さすが師匠と弟子、言うことが同じだ！それで、非鼻音化の方はどういう？」

「まず、用語の確認をすると、非鼻音化というのは定義から言えば、鼻音が鼻音でなくなること。具体的には [ɲ] > [ɲɜ] > [ɜ] という過程を経て鼻音要素がなくなることだけど、実際には第一段階から第二段階への変化も非鼻音化と呼ばれている」

「あれ？私が習った非鼻音化は [m-/n-/ŋ] > [mb-/nd-/ŋg] だったんですけど」

「それも非鼻音化と呼ばれている。でもこの場合、正確には鼻音要素はなくなってはいないから、弱鼻音化と呼ぶ方が適切だと思う。いずれにせよ [m-/n-/ŋ] > [mb-/nd-/ŋg] がなぜ起こったか、それが問題。答えは単純で、全濁音の清音化によって音節初頭に有聲破裂音がなくなったので、それを埋めるように鼻音が有聲破裂音に近づいたということ」

「えーと、[b > p/p^h] の変化によって [b] がなくなったので、[m > mb] の変化が可能になった？」

「そう。もしも清音化がなかったら、非鼻音化は起こるはずがない」

「それも妄想ですか？」

「ごく自然な推論。それを確認するために、朝鮮語でも同様の現象が起こったことを示したのが、例の音声ファイル。‘マジャヨ’が期待される箇所にしばしば‘バジャヨ’に近い発音が聞かれるし、‘モヤ～ボヤ’、‘ソム～ドム’も同様。これは、朝鮮語では語頭に有聲破裂音が立たないことに起因する。語頭の有聲破裂音という隙間を埋めるように、鼻音が非鼻音化の傾向を示すようになっている」

「音声を聴いた限りでは、かなり個人差がありそうですね」

「そうね。実は当の韓国人たちは誰一人としてこの非鼻音化という現象に気づいていない。それどころか世に出回っている朝鮮語・韓国語の教材にも、この現象について説明したものはほとんどない」

「あ、朝鮮語話者自身は意識していないのですね」

「自分が発音しているつमोरの音を‘音韻観念’と呼ぶことがあるのだけれど、当人たちの音韻観念はあくまでも m であり n なの。いくら外国人が mb とか nd になっていますよ、と言っても、何を言われているのか分からない」

「へえ、そうなんだ」

「昔、有坂秀世という学者が重慶出身の中国人の発音を観察していたそうなの。そうすると、その人の発音にはまさに非鼻音化が生じていて、‘米’を [mbi] のように発音していたらしい。ところがそれを当人に指摘したら、自分は mi と発音していると断固言い張ったそうよ (cf. 有坂秀世 1940 「メイ (明) ネイ (寧) の類は果して漢音ならざるか」)」

「つまり、外国人が耳で聞く音声は必ずしも話者当人の音韻観念と同じではない、ということですか？」

「そういうこと。日本の漢音もあくまでも日本人が聞き取った音声で、唐代の長安人の音韻観念とは異なる。一種の伝言ゲームのようにズレが生じている」

「つまり、《長安人の音韻観念=ma/na》→《実際の音声=mba/nda》→《日本人が聞き取った音声=ba/da》という訳ですね」

「そういうこと」

9. 宿題スラスラ

その日の夕食後、若菜は葵先生の説明を反芻していた。頭の中にある音韻観念と他人に聞える音声とはズレがあるということだった。唐代長安音を写し取った漢音は非常に解像度が粗いという仙人の言葉の意味もやっと分かった。長安人が頭の中で {ma/na} だと思っていた音を日本人は [ba/da] という音声として写してしまったのだ。いや、それ以前に、入声の -p/-t/-k を母音付きで ‘フ/ツ・チ/ク・キ’ のように写す所なんかかなり粗い。

仙人の講義は唐詩のことから始まったが、実は日本語と北京語の情報から中古音の姿を復元するというのがテーマだ。入声や全濁音の例を見ても、北京人よりは日本人の方が中古音にアクセスしやすいのは明らかなようだ。よし、宿題に取り組むことにしよう。ポイントはどうか、日本語の濁音の読みが呉音の全濁音に対応するのか、それとも漢音の次濁音に対応するのかを見極めるということだ。若菜はもう一度宿題のプリントを見た。

<宿題>

①呉音と漢音で（強引に）読みなさい。「老若男女」「境内」

②中古音の声母は何か？「木」「岸」「流」「謀」「努」

③中古音 [dau] 上、[bin] 平、[pan] 去、[nap]、[dzap]、[biɛt] [miɛt] [ɲiɛp] の現代音をピンインで書きなさい。

①の「老若男女」は呉音が「ロウニャクナンニョ」、漢音が「ロウジャクダンジョ」だろう。鼻音声母をマ行・ナ行で読む方が呉音だ。「女」の漢音は本来はダ行の「ヂョ」だろう。「境内」は普通「ケイダイ」と読む。「内」は nēi だから、「ダイ」は漢音だ。すると、呉音では「キョウナイ」になりそうだ。

②は北京音で m- になる「木」「謀」は中古音でも [m] で問題なし。木は呉音がモク、漢音がボクだ。「謀略ボウリャク」のボウは漢音でいいとして、呉音は何だろう？そうか、「謀叛ムホン」のムだ。よし、順調だ。「岸」は北京音 àn がゼロ声母で、日本語が「ガン」だから、

中古音が [ŋ] の典型的なパターンだ。「流」は中古音 [l] で問題なし。「努」は北京音 nǔ だから、中古音も [n] だ。「努力ドリョク」は漢音だろう。「憤怒フンヌ」の怒と似ているから、おそらく努も呉音はヌだと思うが、例は思いつかない。

③は盛りだくさんだ。[dau] ㄊㄠˊ は全濁上声だから、現代音は無気音 4 声になるはず。韻母の [au] はピンインの -ao だから、現代音では「dào」だ。[bin] ㄅㄧㄣˊ は全濁平声だから、有気音 2 声になるはず。韻母がそのままだとすると、現代音は「pín」だ。[ŋan] ㄣˊ は去声だから声母にかかわらず第 4 声になる。しかも [ŋ] はゼロ声母になるはずだから、現代音は「àn」でいいだろう。あれ？ひょっとしてさっき見た「岸」ではないか。よしよし。

次からは入声字が続いている。[nap] は次濁入声で第 4 声になるはず。入声韻尾は消えるから、素直に考えれば「nà」になるはず。[dzap] は全濁入声だから、無気音第 2 声になる。[tsa] はピンインでは「zá」かな。[biɛt] も全濁入声だから、無気音第 2 声で「bié」だ。[miɛt] は字濁入声だから第 4 声で「miè」だろう。[ɲisp] も字濁入声だ。ゼロ声母になるから、「yè」だ。ふうー。

10. 中古音を学ぶということ

若菜は宿題を通じて、日本漢字音がいかに中古音を知る武器になるかを実感した。仙人は、日本漢字音は中古音を写した解像度の粗い写真だと言った。細かな区別に関しては日本漢字音だけでは解決できないこともあるということだ。でも、大まかな輪郭だけだとしても、千年以上前の中国語の音声を思い描くことができる、これは凄いことではなかろうか。

若菜は中古音の勉強を通して、古代の日本人が漢字文化を受容し、それを日本語の中に組み込もうとする努力の過程を追体験しているような気になった。そのような努力のお蔭で、日本では日本語だけで科学や哲学を論じられるようになったのだ。これは今取り組んでいるロシア語やドイツ語の学習では感じることはできない感覚だ。中古音を知ることは日本語の歴史の一部を知ることでもあるのだ。

仙人は来週から少しずつ中古音学習の解像度を上げていくと言っていた。徐々に専門用語も増えていくのかも知れない。自分は幸い、大学に入学する 4 月までは自由の身だ。思いっきり中古音に没頭することにしよう。